

曲目解説

ベートーヴェン：ソナタ第17番 op.31-2 「テンペスト」

ちょうどベートーヴェンの難聴が始まり、音楽家生命の危機に瀕した絶望の中で書かれた「ハイリゲンシュタットの遺書」と同時期（1802年）に作曲された。タイトルは、このソナタの解釈を問われたベートーヴェンが、「シェークスピアの『テンペスト』を読め」と答えたことに由来する。シェークスピアの主人公の過酷な境遇に、ベートーヴェン自身の運命を重ね合わせたのだろうか。第1楽章では、苦境に立ち向かう不屈の精神がみなぎり、不安や焦燥感、嘆きが交錯する。そこに天使が微笑みかけるような第2楽章が、希望の光のように響く。第3楽章は、弟子のツェルニーによると、ベートーヴェンが滞在していたハイリゲンシュタットのテラスの下を、嵐のなか急いで通り過ぎる、馬の蹄に着想を得たという。同じモチーフを繰り返しながら展開していく様子が、のちの交響曲「運命」にもつながる、実験的な試みである。暗く劇的な中にも美しさを秘めた、不朽の名作である。

ベートーヴェン：ロンド・ア・カプリッチョ op.129 「失われた小銭への怒り」

ベートーヴェン独特のユーモア溢れるこの作品は、1795年に作曲されたが未完で終わり、のちにディアベリによって補完された。このタイトルもベートーヴェン自身によるものではなく、本来は「奇想曲的なハンガリー風のロンド」であった。装飾的・即興的要素が濃く、急速な16分音符が縦横無尽に駆け巡る様子は、小銭をなくして慌てふためく様子を連想させる、陽気でユーモラスな小品である。実際、ベートーヴェンの部屋は常に雑然としていて、色々なものが散らかっていた。すぐに小銭を置き忘れたり失くしたりして、そういった自分に腹を立てていたという伝説もある。

ベートーヴェン/カルクブレンナー：交響曲第9番 op.125 より第1楽章

1785年ドイツに生まれたカルクブレンナーは、幼少の頃より頭角を現し、ベートーヴェンが10歳のカルクブレンナー少年の演奏を聴き、その華々しい将来を予言したという逸話も残っている。ピアニストと教育者という2足のわらじで華々しいキャリアを築き、1826年パリに居を定めたカルクブレンナーは、ショパンをはじめ、当時の若い音楽家たちの尊敬を集め、パリの音楽界の最高権威として君臨した。当時のフランス国王、ルイ・フィリップが大のベートーヴェン好きだったことから、カルクブレンナーは国王を喜ばせようと、ベートーヴェンの交響曲全9曲のピアノ編曲を思い立った。リスト版よりも25年程前に編曲されたこの「第九」は、カルクブレンナーの持てる技術の集大成とも言える意欲作であり、フルオーケストラをピアノ1台で色彩豊かに再現することに成功している。この第1楽章は、ベートーヴェンが絶望の中から光を、そして人間の真理を求めてもがきながら闘う、まさにベートーヴェンの生きざまを反映している。

バッハ/ブゾーニ：シャコンヌ

バッハの「無伴奏ヴァイオリンのためのパルティータ第2番」の最終楽章を、自身も優れたピアニストであったブゾーニが、華麗なピアノ曲に変身させた。8小節のテーマに続く30の変奏から成る長大なこのシャコンヌは、バッハが最初の妻マリア・バルバラの死に捧げた追悼曲だという説がある。比較的短い他の楽章に対して、14分ほどの演奏時間を要するというだけでも、バッハがこの曲に特別な思いを込めたと想像できる。そのような視点から聴いてみると、死別の悲しみからの神の救いを求めた、崇高な祈りの音楽としてひしひしと胸に迫る。バッハのオルガン曲も多数ピアノ曲に編曲したブゾーニだけに、荘厳な教会に鳴り響く重厚なオルガンを思わせる、絢爛豪華な仕上がりになっている。

モシュコフスキー：愛のワルツ op.57-5

1854年ブレスラウ（現ポーランドのヴロツワフ）でユダヤ系の裕福な家庭に生まれたモシュコフスキーは、19世紀後半から20世紀初頭にかけて大変な尊敬と人気を集めたピアニスト兼作曲家であった。同胞のパデレフスキは、「ショパン以降、ピアノのためにどのように作曲すればよいか最も心得ており、その書法はピアノ技術の全てを網羅している」とモシュコフスキーを評している。「サンシャイン・コンポーザー」の異名を持つモシュコフスキー、その優雅で軽快な音楽は、日常の煩悩を忘れさせて人の心を明るく照らし、魅惑的で格調高い別世界へと誘ってくれる。中でも典型的なサロン音楽の小品集「春 op.57」の第5曲『愛のワルツ』は、情熱的な中間部を持つロマンティックなワルツである。

モシュコフスキー：秋に op.36-4

「8つの性格的小品集 op.36」からの第4曲。哀愁を帯びた日に、風が落ち葉をハラハラと舞わせる情景を描写している。目まぐるしく躍動する細かい音型が、溢れる色彩感を醸し出し、生き生きときらめいて、こずえに重なる木々の葉に光が散乱しているかのようなようである。曲を貫く求心力で、透明な響きの中にもどこか底知れぬ幻想の深淵に引き込まれそうな錯覚さえ覚える。小品ながらも、モシュコフスキーの研ぎ澄まされた感性が際立つ珠玉の作品と言えるであろう。

ワーグナー/モシュコフスキー：イゾルデの愛の死

リチャード・ワーグナー(1813-1883)のオペラ「トリスタンとイゾルデ」から、冒頭の前奏曲と最終場面を編曲した『イゾルデの愛の死』は、1914年に発表され、ブゾーニに献呈された。神々しい音楽の波に溺れていく喜びを歌い、トリスタンを抱きながらイゾルデ自らも死んでいくという、感動のラストシーンである。モシュコフスキーはオーケストラ・サウンドとピアノの名人芸を融合させ、このオペラのクライマックスの真髄をとらえている。往年の名ピアニストのアール・ワイルドは、この編曲がリストのものよりも優れていると考えていた。

ビゼー/モシュコフスキー：「カルメン」より「ジプシーの歌」

ジョルジュ・ビゼー(1838-1875)のオペラ「カルメン」より『ジプシーの歌』による、この演奏会用トランスクリプションは、ビゼーの傑作をさらに昇華させている。「セギディーリャ」冒頭テーマをもとにした、誘惑的な序奏に続く「ジプシーの歌」。モシュコフスキーは、テーマが繰り返されるごとに、技巧レベルを上げていき、その独創性と名人芸を駆使して、カルメンの気高さと、情熱的な華を美しく甦らせている。

※モウリッツ・モシュコフスキー（1854年8月23日ヴロツワフー1925年3月4日パリ）

ポーランド出身のユダヤ系ピアニスト、作曲家、指揮者。ポーランド語名 マウリツィ・モシュコフスキ。ポーランドの血は父方から受け継いでいるだけであった。生前は高い尊敬と人気を集めたピアニストであった。ショパンのエチュードの導入などに習う『15の熟練のための練習曲 作品72』の作曲者として名を知られている。彼の兄であるアレクサンダー(英語名)はベルリンの著名な作家・諷刺家であった。